『アイマスＳＳに偽装された好きな曲を紹介する転生者の話』

黒崎セシル

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

アイドルマスターの世界にひょんなことから転生してしまい、神により音楽の才能をもらった一人の男がいた。

男の名は伊達直人。

前世が山田太郎という普通の名前だったのでせっかくだからカッコイイ名前にしてもらいつつ、賜った才能をぶちまける!!

【ネタバレ】これはタイトル通りアイマスＳＳに偽装された、作者が好きな楽曲をぽこじゃか書き連ねるお話です。

注意：本編中において楽曲の独自考察や解釈がございます。ご注意ください。

目次

『成し遂げたぜ。』――――――――――――――――1
『さあ、始めよう、僕の炎（情熱）』――――――――――――4
『プリキュアも仮面ライダーもブラックはクソ強い、よってイメージカラー黒の真は超かわいい、証明終了』――――――――――10
『ＢＬＵＥ　ＷＡＴＥＲ　ＢＬＵＥ　ＳＫＹ』――――――――14
『まるで月光の伝説のように』――――――――――――――26
『ちょっと古いもの「にも」いいものはあるということが、なぜわからん!?』――――――――――――――――――32

『成し遂げたぜ。』

『アイマスＳＳに偽装された好きな曲を紹介する転生者の話』

第一話『成し遂げたぜ。』

思えばそれは、非常に不思議な出会いだった。

私の名は高木順二郎。

ある、アイドルプロダクションの社長をしている。

その日は懇意にしてくれている、業界的には同期に当たるテレビ局の役員へと、我７６５プロのアイドルの番組起用に関する簡単な打ち合わせのため、遅めの昼食もかねての話し合いを行った。

初めに私が語った不思議な出会いは、まさにその帰りの出来事だった。

時はアイドル戦国時代、そんな中、もちろんアイドルとは方向性が異なるロックバンド、シンガーソングライターをはじめ、様々なアーティストが入り乱れて鎬を削る時代。

昭和が終わり、そして平成を迎えた今も、夢のために邁進せんとする若き歌い手たちが、ストリートミュージシャンとしても活動をしていた。

ふと、タクシーを拾いに駅に向かう途中、耳に入るエレキギターの音があった。

どうやらこの駅前にも夢をつかもうとする若き音楽家がいたらしい。

軽快で、どこか懐かしいギターの音に目をやれば、一人の青年と目が合った。

年若い青年の、淡い悲恋のような歌詞にも聞こえるがその青年はその声に、歌に、詩に、「ただ一人、誰かに逢いたい」といったような、ともすれば迂遠な感情をこめていた。

そのまっすぐな瞳が、歌が、どうしようもなく私の心をつかんだ気がしたのだ。

「――」

やがて一曲が終わり、この曲を聴きに集まったであろう確かな数の観客から拍手が送られる。
素直にいい曲だと、心底思ったものだ。
ギター一本で、おのれの歌声で、ここに居た人々はまるでアイドルのドームライブのような熱狂を共有していた。
「あぁ、キミ」
なんとなしに、観客に礼をしつつ後片付けを行う青年に声をかける。
「何でしょう？」
青年が心底驚いた顔で応答してくれた。
それもそうだ、割とロックな曲だったはずのラストの直後に、よもや背広の年配が声をかけるとは思うまい。
「先ほどの最後の曲は何というタイトルだい？」
答えはおそらく決まっているとは思うが、私はそう尋ねた。
「ああ、ＳＵＢＭＡＲＩＮＥ　ＳＴＲＥＥＴです」
はにかみながら青年は答えた。
なるほど、歌詞にも確かに出てきた言葉だった。
だが、この作曲・作詞はおそらく彼のオリジナル。
これほどのセンスを持つ逸材が今まで眠っていたのかと、驚愕する。
その時だった。
これまでのプロダクション運営において、数々のアイドルたちをスカウトする際に私の中で必ず起こる、ある種の「ときめき」とでもいうべきか。
衝撃とでもいうか。
ともかく
「ティン！ときた！」
私はその場で手をたたき、気が付いた時には彼の肩をつかんでいた。
「キミ！是非とも我が７６５プロダクションでその才能を発揮してみないかね!?」

少なくないギャラリーがざわつくのを感じた。
ありがたくも、今や押しも押されぬトップアイドルとなった我が社のアイドル達。
仮にもそんな会社の社長がこんなところにいるとはおそらく周囲の人々も思わなかったのだろう。
矢庭に周囲の喧騒が大きくなる中、その青年は一言つぶやいた。
「あなたなら、もしかしたら見つけてくれるんじゃないかって、思ってました」
勝手にですけどね。
と続けて彼は照れくさそうに笑った。

「というわけで、赤羽根プロデューサーに続き、二人目の男性社員となるのが彼だ!!」
高木社長の言葉の後に俺は続けて自己紹介をした。
「伊達直人です。みんなのためにサウンドクリエイター兼作詞家として765プロに加わることになりました、どうかよろしく」
まさか大好きな765プロに自分が所属するとは（それが目的で生きてきたともいえる）転生もしてみるもんだ。
ありがとナス神様！アーメンハレルヤ妙法蓮華経アクバル！
やったぜ。

『さあ、始めよう、僕の炎（情熱）』

大忙しの人気アイドルたちが、その日は珍しく全員午前中に事務所へと召喚された。
つい先日二度目のオールスターライブを終えたばかりの彼女たちは、理由を思いつかないままに社長の到着を待っていた。
そして、到着後流れるように前回のオチとなったため彼女たちは一瞬理解が及ばなかった。
数秒を経て、音楽と歌に並ならぬ情熱を持っている如月千早が覚醒する。
「専属の方を雇うんですか?!」
「その通りだよ如月君！そして彼はすでにみんなのために楽曲を作ってくれているんだ！」
食い気味の社長の返答に、少女たちが相次いで歓声を上げた。
晴れてトップへの道を歩み始めた彼女たちにとって、作詞と音作りのできる人員は、これまで外側の人だった。
今回伊達直人という男が入社することで、今まで以上に楽曲を売り出すことが可能になる、と思われる……はずだ。
問題になるのはこの男の実力のほど、この一点。
「もー作ってるってことはー、もしかしてダテッチ音源持って来てるってこと？」
「ハイパーサウンドクリエイターじゃん！」
双海亜美が早速あだ名で呼びつつ期待の目を向ければ、続く姉・真美が不確定な賞賛を浴びせた。
「はっはっは！それぞれのイメージの楽曲やアルバム何枚かなら、すぐに出せるという自信があるよ」
直人はからからと笑い、自慢げに少女らに伝える。

「はっはっは！それぞれのイメージの楽曲やアルバム何枚かなら、すぐに出せるという自信があるよ」

早速双海パイセン（妹）にあだ名をつけられていい気になった俺は即座にドヤ顔でそう言った。
全員から「お～!!!」と声が上がる。
事実楽曲自体はかなりあるしイメージに沿ったものも多々書き下ろしている。
まあすべてが前世では存在していた楽曲だ。
今この世界には俺が書いた楽曲が実在しない。
このアイマス世界線（世界線って言いたいだけ）は芸能界、それも歌手やアーティスト、作詞家に至るまで、戦後以降の歴史が大幅に違っている。
そのうえで転生時に手に入れたであろう、所謂チート的な能力がおそらく「音楽に関する才能」。
それを使って、前世に置いて好きだったあらゆる楽曲を書き起こし再現して、ため込んである。
７６５プロのアイドル諸君をこの先１０年以上食わせていくだけの数が余裕でどころかあふれてるレベルだわ！
俺はさっそく持ってきたノートＰＣを取り出しファイルを開く。
「まあ、不安もあるかもだし、皆まずは一曲聞いてみてくれ」
ファイル名は『Ｐｅｒｆｅｃｔ　Ｓｔａｒ　Ｐｅｒｆｅｃｔ　Ｓｔｙｌｅ』終わってしまった大切な恋を想い、過去に戻りたいという淡い悲しみを歌った、前世のテクノポップユニットの一曲だ。
残念ながらあんなかわいい声は出せないので、音源は音声合成ソフトを使った女性の声を加工して使っている。
いくらチートを賜ったとはいえ、そこまでの力を天は与えないのだ。
皆聞き入ってくれて、ビートに合わせて首が動く子もいる。
借り物の楽曲（この世界に置いてはオリジナルとされてしまうが）でも、反応が良くてうれしくなってしまう。
いい曲だもんね、これ。
あれこれ思考しているとあっという間に４分と少しの楽曲が再生を終える。

「どうだったかな？皆には歌ってほしい曲がいくつもあるんだ」
余韻を壊さないように極力優しい声色で俺は問うた。
わかりやすい音程と、歌詞の内容的にも年頃のお嬢さん方にはかなりぶっ刺さる曲だと思う。
「すごい……すごいです！」
一番最初に反応をくれたのは我らがリーダーレッド、天海春香だった。
それを皮切りに余韻を抜けた少女たちの目が輝く。
すいません、それ、すごいの俺じゃなくてもとの楽曲なんですよｗｗｗ
「初めて聞いたのに、なんだか懐かしいような……ちょっと悲しい曲のはずなのに、なんだかすごくあったかい感じなんです」
すっかり引き込まれてくれたのか、カラテ乙女の菊地真は、少し潤ませた瞳と、軽く上気した頬で郷愁を吐露した。
めっちゃオトメやんけ！かわいすぎて倒れそうになるわ！
「ちょっとだけ胸がチクってなったけどとってもいい曲ですーっ」
高槻やよいちゃんが俺に向けて笑顔で感想をくれた。天使かよ（結婚しよ）……あ^～耳がニゴニゴしゅりゅ^～しあわしぇ^～
「まあ、ジャンル的に竜宮向きではあるわね」
間髪置かずに水瀬伊織。うひょ～！素直！素直いおりんマジ聖母。
なんやねんこの神がかった順番、百年たたずともやよいおりってことか!?
「てくのぽっぷと申しましょうか、まことに良き曲です」
おお！四条貴音お姫ちん！わざわざひらがな横文字（語彙かいめつ）
で答えてくれるとは！ありがたや～。
ホントに色っぽい声してらっしゃる。
「美希的にはもっと明るい感じがいいかな～、でもいい曲なのはジジツなの」
脱・昼寝キャラを達成した星井美希はストレートに自分の意見をくれる。

生の美希は、キラキラしすぎてすごい、具体的にはヤバい（小並感）
「曲としてはユニット向きだよね☆」
「三人か四人くらいがベストと見た！」
双海姉妹の亜美・真美はそれぞれ鋭い感性で指摘する。
おめーら天才かよ、その通りユニット向けの曲ってか三人用だよｗ
「伊織ちゃんの言う通り、竜宮みたいな二人以上のユニット向けな感じがするわねぇ？」
あ、あずさパイセンもその意見ですか。
まあテクノポップ系かつユニット曲経験者だもんな。
「でもどちらかというと、生歌向きの曲とは違う感じがします」
さすちは!!!そこに気が付くとは。
「自分としてはダンス向きとも言えないけど、パフォーマンスとか演出で見せる曲なんじゃないかとおもうぞ」
おお！我那覇！響！
君たちの鋭さは何かこう、ユニークスキルかなんかか？
ダイス振って事前に高ステ持って生まれたのか？
「ジャンルと持ち歌の影響もあるけど、萩原さんにはなじみ深い曲調じゃないかな？」
なかなか初期位置から距離の縮まらない雪歩氏にあえて俺からも話を振る。
萩原雪歩のアイドルとしての初期の持ち曲である『Ｋｏｓｍｏｓ，Ｃｏｓｍｏｓ』に通じるジャンルのはずだ。
「は、はいっ！ガチャガチャしすぎない曲だし、リリックも素敵ですっ！」
ほう、なかなかにアーティスティックな意見、っていうかリリックに食いつくのか、そしていまだに距離遠いなｗｗｗ
「伊達さん的にはどうなんです？生歌やエフェクトに関しては」
羽根Ｐはさっそく売り出しの算段か、悪くない。
「俺としては７６５のみんなは歌うの上手だし、エフェクトはＣＤ音源のみ、もしくは両方サンプリングとして考えてます」
これは、俺独特の意見だ。

確かにパフォーマンス重視の口パクもありかもしれないが、アイマスの子たちはみんな生歌ガチ勢（今名付けた）なのでどちらでもできると思っている。
でも、ただ売り出すための曲ってだけじゃ彼女たち自身が納得いかないだろう。
せっかくの楽曲、ライブでも思いっきり歌ってほしいのがホントのところだ。
「スタジオ押さえて準備もしなきゃいけませんねっ」
真と同じくらい曲にノリノリだった事務員の音無小鳥が興奮気味に告げる。
正直メンバーが決まってスタジオさえあれば後はアイドル達に曲を覚えててもらうだけなのだ。
「竜宮の楽曲も依頼できますかね……？」
控えめな声で秋月律子プロデューサーが尋ねてきた。
「あったりまえだろぉ～？（急激なハイネ感）７６５の音楽屋なんだから当然書きますし、何なら明日にでもフルアルバムで渡しますよ」
まあアルバムはさておきヨロシクりっちゃん！
トランジスタグラマーでできる女で世話焼きで姉属性でおしゃれメガネでヒップラインのエロいパンツスーツのりっちゃんホントすこ。
おっぱいもおっきいし。
「まあそういうわけで、伊達君を中心とした新プロジェクトも開始しようと思うよ、名付けてＤ　ＰＲＯＪＥＣＴ！彼をコンポーザーとして、すべての楽曲を手掛けてもらいつつ、特別編成ユニットによる連続リリースだ！」
力強い社長の宣言に、すっかりその気のアイドルたちの掛け声が事務所に木霊した。

某日、とあるテレビ局
「おおー、じゃあ何？７６５さんに新しく入った人が作詞も作曲も

やってくれてるんだ？」
サングラスにオールバックの『お昼の顔』で有名な番組ＭＣが少女らに声をかけた。
壇上に設けられた椅子に座り、周りの名だたるアーティストたちにも引けを取らぬ堂々とした輝きを放つ７６５プロの面々。
「はいっ！Ｄ　ＰＲＯＪＥＣＴ　コード：パルファムっていうチーム名で今回は私と雪歩と美希のユニットになったんです」
まぶしい笑顔でユニットリーダーの春香が答える。
「あ、あのっ、ポップな曲調ですけど、世界観のしっかりしたリリックにも注目ですっ」
雪歩が相も変らぬ緊張気味な声で続け「ムネにキュってくる歌詞だと思うの」と美希が締める。
「なーるほど、新人さんの作った曲だけど自信満々だねぇ……それでは早速、準備の方おねがいします」
ＭＣに促され席を立つ三人。
「さあ、ではお聞きいただきましょう、今や押しも押されぬ７６５プロダクションの新曲、今回はあたらしいプロジェクトのユニットとともにお届けします」
流れるような男性ＭＣのアナウンスに、そばに控えていた女性ＭＣも続く。
「それではお聞きください、今月１５日にリリースされます、７６５プロ『Ｄ　ＰＲＯＪＥＣＴ　コード：パルファム』で『Ｐｅｒｆｅｃｔ　Ｓｔａｒ　Ｐｅｒｆｅｃｔ　Ｓｔｙｌｅ』です」
この世界にはなかったはずの楽曲で、アイドルたちが輝きだす。
「ああ、光が……」
スポットライトの輝きに目を細め、転生者は一人、そんなネタをつぶやいた。

『プリキュアも仮面ライダーもブラックはクソ強い、よってイメージカラー黒の真は超かわいい、証明終了』

「よう菊地、やってるな……？」

俺こと、伊達直人はレッスン場の扉を開くなり、身体を動かしていたまこまこりんに早速声掛けする。

この後船で出港し爆発するところまで行けば満点だが、生憎ここはアイドルのレッスン場だし、俺は元コマンド―でもなかった。

「あ、おはようございます伊達さん！」

きりがよかったのか、真はいったん動作を止め、こちらに返してきた。

「あさイチでこっちに来るなんて珍しいですね？」

滴る汗を拭きながら、真がこちらに投げかけてくる。

それもそうか、普段は基本的に事務所にいるし、羽根Ｐやりっちゃんのプロデュース業務とは違い社長からは、「ある程度の自由な時間」をもらっている。

もちろんたまたま超多忙状態になった場合は送り迎えや、先方との打ち合わせなども手伝ったりはするが……。

話がそれそうだな。

「あたらしいチームと曲が決まったから教えに来たよ」

カードのように指に挟んだＣＤをちらつかせながら俺は、まっすぐに彼女を見据えた。

「それって……」

真から大きな期待のまなざしが向けられる。

「今回のチームリーダーはお前だ、菊地」

「よっしゃあああああぁぁぁっ!!!」

超食い気味だなオイ。渾身のガッツポーズまことくんやないか！

某大墳墓の守護者統括でももう少し溜めたぞ？

しかしまあ、喜んでくれてるしそこは、多少はね？

「チーム名はコード・アリスだ」
曲に合わせてすでに決まっていたチーム名を告げると、彼女は不思議そうにかぶりを振った。
「アリス……ですか？」
「ああ、菊地をユニットリーダーに据えて水瀬と高槻をバックに据える」
やよいおりをサブに置くことでユニットと楽曲の持つ世界観をさらに加速させることができるはずだ。
今回の楽曲はそういうものだからだ。
「曲、聞いてみても？」
興奮気味に俺の手にあるディスクを指さすまこりん。
まあまずは聞いてもらうとするか。
「かまわないよ」と返事して、レッスンルームのＣＤプレーヤーにディスクを入れる。
「タイトルは『ワンダードライブ』」
流れ出した曲はポップでキャッチーなサウンド。
前回の曲に通ずるテクノ調のＪＰＯＰである。
夢、或いは自身の決めた道にまっすぐに向かいながらも、さらに世界（自己解釈も含むならば、おそらくは自分も）を変えたいと願う女の子の歌。
追加するなら俺自身はこの曲はそういう女の子を応援する歌なんだとも感じている。
「（アニメは短かったけど、短いなりによくできた作品だったな）」
などと前世の思い出に浸りながら俺はまこりんとともに曲に聞き入る。
元の曲に忠実に作っているので、サウンド自体はおかしくない。
あとは魂の入った生の歌声さえあれば、この曲はこの世界に「甦る」前にも思ったし、常々考えるのは、せめて自分が前回の人生で好きだった音楽をこの世界にばらまきたい。
といったことだった。
相応に反応がもらえることもわかったし、その曲たちが好きな俺と

しては兎に角うれしい。
それによって765の子たちと接点が持てるのもなお嬉しい。
――♪……
楽曲が終わり、再生が止まった。
「Ｄｏ―Ｄａｉ？」
ネタ交じりにまこりんに感想を求めれば
「超絶かわいい曲ですね!!!!」
と、視聴の段階から輝いていた彼女の眼は、いっそ中にハートも見えるんじゃないかというほどキラキラとしていた。
「ホントにボクが歌ってもいいんですか、コレ？」
興奮冷めやらぬままにまこりんは訪ねてきた。
あったりまえだろぉ～？（ハイネ・ヴェステンフルス並感）
何ならそのために作ったまである。
「菊地だって一人の『夢見るカワイイ女の子』だろ？だったら歌ってくれると俺は嬉しいかな」
我ながらこっぱずかしい言葉だとは思うが、コレを譲る気はない。
だってそうだルルォン？
765プロの女の子は皆可愛いって、はっきりわかんだね。
「なっ、カワイイなんてそんなぁ、褒めてくれても何もでませんよぉ～？」
と、まこりんは照れながらも、ならばせめて、言葉とともに上気した頬に手を当てながらクネクネしつつ鋭い強パンチ出すのヤメナサレｗｗｗ
しかし、黄金の鉄の塊でできたナイトにあこがれる俺の防御に隙はなかった！
「ひとまずＰＶも撮ってしまおう、今回はマジで不思議の国のアリスみたいな衣装にするから……あとウィッグね」
ＰＶの構想もすでにある。
元の楽曲のＰＶ再現も捨てがたいが、この世界に置いては演出・脚本伊達直人でお送りしたいと思う。
決してロングヘアのまこりんが見たいとか、そんな邪な思いは抱い

てないからな？本当だぞ!?（嘘です）

なお、今回のＰＶにおいては、ラスサビにおいて衣装とウィッグが外れて、新たな衣装と、いつものまこりんの髪型に切り替わる演出をしてみたが、

最初のロングまこりんの時点でもだいぶインパクトがあった上での高速切り替えがＰＶ映えして好評だったようだ。

歌詞に合わせる感じでやりたかった演出なんだよな。

サブメンに入れたやよいおりも楽曲の世界観にマッチする見た目でグッドだ。

すごくあけっぴろげに、飾らない言葉で言えば、いおりんはシャルル居るからアリス感がそもそもあるキャラクターだし、やよいは問答無用のロリ枠である。

完璧な采配だと自負しているし、想像以上に反響を呼んだ。

それに何よりも、普段のまこりんとは一味違う、ロングヘアまこりんが見ることができたのですごくよかった。（語彙力かいめつ）

改めてブラックは古今東西最強説が図らずも実証された結末になってしまったか……。

ほら、アレですよ。

クウガも黒の時が最強でしょ？

つまり黒をイメージカラーに持つ菊地真というアイドルは全空一なんですよ。（暴論）

なおＰＶ公開初日に「菊地真　ロング」が検索トレンドになったことは言うまでもないだろう。

『ＢＬＵＥ　ＷＡＴＥＲ　ＢＬＵＥ　ＳＫＹ』

第四話『ＢＬＵＥ　ＷＡＴＥＲ　ＢＬＵＥ　ＳＫＹ』

――７６５プロ　ＰＭ１：２５――

事務所にて書類整理を手伝いながら、俺こと伊達直人はここ数日ずっと悩みを抱えていた。

ひとえに次のＣＤのことである。

次の構想はマキシ。

３曲を収録することにして、歌うアイドルも決めてある。

だが、ここにきてヘタレ精神のようなものが作用し、苦悩にさいなまれているのだ。

「ドウスレＢｉｎｄｅｒ……」

発音をネイティブにしつつため息が漏れた。

でも、ずっと考えていた構想だ。

ゲームが好きでアニメが好きでアイマスが好きで、７６５プロが好きな俺はどうしても彼女にこの３曲を歌ってほしいのだ。

言い方を変えると彼女だからこそ歌えるし、曲に想いが乗る。

この３曲は彼女が歌わなければ『甦らない』という言い方もできるが、結局のところ俯瞰的に見て、ファン心理で彼女に歌ってもらいたい一心なのだ。

「あの子はアイドルで歌手だ……じゃあ俺は何だ……？」

まあ少なくとも『ただのカカシ』や『的』ではない。

俺はサウンドクリエイターだ。

ただ、曲を作って渡すだけじゃない。

それは、彼女のことが好きだからだし（もちろんみんなすき）、７６５プロが好きだからだし、だからこの力を使って再現した曲を彼女に歌ってほしいのだ。

歌がすきなあの子に……

――

「……さん……伊達さ～ん」
はっとして声の聞こえた方に顔を向けると笑顔の音無小鳥お姉ちゃんが呼びかけていた。
いかんいかん、もう少しで真理にたどり着きそうなくらい集中していた。
「集中しすぎてました……どうしました？」
若干恥ずかしくなったため後ろ頭を掻く俺。
「プロデューサーがちょっと間に合わなさそうなので、局に千早ちゃんを迎えに行ってほしいそうなんです」
すまなそうにそう告げる音無さんは、なんていうか、素直にかわいいです。
７６５のここすきポイントの一つ、「事務員と女性プロデューサー可愛すぎ問題」である。
他にもあげると、「社長の声強すぎ問題」や「雪歩大天使問題」「やよい大天使問題」等がある。
最後の二つは別に問題でもなんでもねえな、単なる事実だ。
話を戻そう。
「オッケーです、今日はＢＢＳでしたよね？」
即答し、車のカギを確認しながら予定が間違っていないかを問う。
「ハイ！お願いします」
キラキラの笑顔でお願いされてしまった。
「お姉ちゃんキャラなのにかわいいとか反則ですよ」
思わず言葉が奔る。
「ふえっ!?かわっ!?」
即座に真っ赤になって停止する音無さんをよそに、俺は事務所を後にした。
「さーて、これもめぐりあわせか、ドライブデートとしゃれこみますか」

――スタジオ　ＰＭ２：３３――

「そういうわけで俺は迎えに行けそうにないんだ」

電話の向こうでプロデューサーが申し訳なさそうに語る。

「大丈夫です、伊達さんを待ってればいいんですよね？」

もう一度確認。

事務所には自力でも、交通機関でも戻ることができるけれど、迎えに来てもらえるのはありがたいことだし。

「ああ、もう向かってくれてると思うから心配ないはずだ」

そういった後「それでは」と通話を終えた。

私こと「如月千早」はそこで一息つく。

来週からお昼の番組内に私のミニコーナーをもらえることになって、今日はその顔合わせだ。

内容はワイドショー内のショート枠でその名もズバリ「如月千早の青い鳥探し」である。

いろいろなことに本当の意味で興味が持てるようになった最近では自分でもびっくりするくらい貪欲に多様な仕事に取り組んでいる。

今回のこともその一つ。

各地の名店・老舗、或いはそれにこだわらず隠れている「小さな幸せ」が発見できるようなおすすめスポットなどを紹介するコーナー。

私としては物事に対して思ったことを素直に言っているだけのつもりだけど、どうも「情緒ある誌的な感想」らしい私のレビューが、たまたまディレクターのツボだったらしい。

ありがたいことだ。

ここ数年はいろいろあった。

本当にいろいろだ。

歌を失った時もあった。

自分が保てず、声が出なくて歌えない。

そんな出来事だ。

でも、今は違う。

みんなのおかげで取り戻すことができた「歌」は、自分でも驚くほ

どよくなっていた。
今では恐れ多くも「歌姫」なんてたいそうな二つ名もささやかれる。
こんなに嬉しいことはない。
自分の歌が認められているという充足感とまだ足りないという確かな「熱」が今の私に満ちている。
「……足りないといえば」
ふと、言葉が漏れた。
最近社長がスカウトしてきたサウンドクリエイターの伊達直人さん。
初めて聞かせてもらった曲は衝撃だった。
とてもこの間まで一般人だったとは思えない音作り、厚み。
売れる事だけが目的ではない独自の世界観は、私の心を圧倒した。
ジャンルも広く、引き出しが多い彼の音は聞いていて飽きない。
そんな人が私たちのために専属で曲作りをしてくれるというのは非常に嬉しかった。
何かが足りないとすれば、まだ私に楽曲をもらえていないこと。
まあ、伊達さん本人も気難しい人ではなく、接しやすいし、変に壁のない人だ。
強いてあげれば亜美や真美と悪戯を画策したりするような部分が良くも悪くも「子供」みたいで、年上に見えないところもあるし、意外にかわいいものや甘いものも好きだったりする。
そのあたりを抜き取ってみると
「伊達さん……まるで手のかかる弟みたい」
ふいに冗談めいた言葉が出た。
思わず笑ってしまう。
「そりゃどーも、千早姉さん」
背後から笑い声。
私は驚愕した猫のような素早さでバッっと立ち上がり振り返る。
伊達さんが悪戯っぽく笑って立っていた。
「脅かさないでください！」
局の廊下で叫んでしまった私は悪くない、絶対に。

ひとまず如月を落ち着かせると、車へ誘導し、発車する。
「すみません、自分でもあんなに驚くとは思わなくて」
助手席に座る彼女はそう言った。
いや、こっちこそ悪かったからね。
でも姉属性マシマシ状態のちーちゃんが見れて、ボク、マンゾク！
クールそうに見えて感情の動きは大きい娘だからなぁ、この子は。
「まあ、さっきのはいろいろとお互いさまだよ。」
しかしながら
「弟ネタで軽口が飛んでくるとは思わなかったけどね」
茶化すように揶揄う。
「それは……もう振り切っていますし、それとこれとは別のことですから……」
幾ばくかの思案ののち、如月はそう答えて笑顔を見せる。
そうか、それならいいことだ。
「ところで、どちらに行かれるんです、事務所の方面ではないですよね？」
赤坂からの帰りでは使わないルートに彼女は即座に気が付いた。
これは変に勘繰られないようきちんと伝えておくべきだな。
「この後はフリーだろ？せっかくだから伊達さんとドライブデートしようぜ」
さあどう出るちーちゃん!?
「なっ……いきなりなにをいいだすんですか!?」
おお^～めっちゃ動揺してる。
かわいいですね、クォレハ。
反応が見たくてわざと言っている自覚はあるが、ちょっとまんざらでもなさそうな感じがすごく、こう、刺さるｗｗｗ

「冗談だよ、半分」
あえて場をかき乱す俺。
「それは半分本気ってことじゃないですか！」
上気した様子で憤る如月。
反応を一通り楽しんだところで、本音を暴露しますか。
「建前タテマエ、プロジェクトの話もしたいし」
横目に如月を流し見しながら笑いかける。
「でしたら、エスコートされるのもやぶさかではありません」
ふわりひとひら笑顔が咲いた。

――海浜公園　ＰＭ３：１６――
「さて、ここでいいか」
駐車場に車を停め、エンジンを切る。
楽曲を聞かせるためにも、喧騒は遠い方がいいこともありこの海浜公園をチョイスした。
「それで、プロジェクトのお話というのは？」
待ちきれない様子で如月が促す。
ふむ、どうなるか試してみるか、ハッハッハ。
「聞いてもらいたくて、歌ってほしい曲が三つある」
そう即座に受け答えしながら後部座席のバッグにしまってあるノートＰＣを取り出す。
「３曲もですか!?」
心底驚いた様子で声を上げる如月だったが、すぐに表情は真剣そのものになる。
「断言するけど、この３つの曲は『今の』如月千早にしか歌えない」
それだけ言って俺は、あとは無言のまま再生ボタンをクリックする。
彼女にとっては大きな意味を持つこととなるだろう一曲目は、タイ

トルがすでにダブルミーニング。
如月千早を前世から知っている生粋のオタクならばこれほど彼女にマッチする曲はそうはないはずだ、おそらく。
ファイル名は『ＹＯＵ』
前世に置いて一世を風靡したあの「ひぐらし」のテーマの一つだ。
この曲を嫌がった彼女にひっぱたかれることも想定していたが、そこへさっきのやり取りがあった。
きっと彼女はこの曲を想い、そして「甦らせて」くれるはずだ。
少なくともそう信じている。
だってそうだろう。
彼女はおのれの傷を誇りへ変えて羽化したのだから。
まずは一曲が終わる。
少しの不安を抱えながら顔色を窺う俺。
「あ……」
そう、声を漏らしたのは俺だったのか彼女だったのか。
ともかく、彼女のその頬にはひとすじ、涙が流れていた。
ぐおおおおおおおおっ!!!!なんかよくわからない罪悪感とかが俺の体を駆け巡ってスパーキン！
「いえ、あの……違うんです、これは、その……」
やや落ち着かない様子で、軽くしゃくりあげながら如月は矢継ぎ早に語った。
泣かせてしまった……
「違うんです……いろいろあった自分が、『今』この楽曲を素直に喜べることがうれしくて」
涙をぬぐいながら笑顔を見せる如月。
ソウダッタノカ……よかった。
マタマモレナカッタかと思ってひやひやしたぜ。
「すみません、急に……」
そう目を伏せる彼女に俺から語り掛ける。
「構いやしないよ、合成ボイスで君ほどの人が心動くんだ、じゃあ如月の生歌が入ったらどれほどの破壊力になるのか、そこが問題だ」

いい曲になるに決まってるよ。
「ありがとうございます……次の曲もいいですか？」
一息ついた如月はさらに促してきたので、早速再生ボタンをクリック！

それは大いなる「母」に対する礼賛の歌。
直接的に「おかあさん」に感謝するという曲ではなく、その「母性」への深い感謝と畏怖、或いは憧憬のような、あの有名声優に書き下ろしたことでも知られるもので『馬の骨』と呼ばれるフレンズたちならだれもが知る一曲。
『ＭＯＴＨＥＲ』
前世において俺的テクノ全一の自称用務員こと、平沢進の楽曲だ。
これに関しては俺が生歌で師匠版を入れて収録してある。
もちろんみやむーバージョンも用意はある。
深く、静かに呼吸しながら如月は聞き入っていた。
その所作の一つ一つがなんだか美しい彫像を見ているように錯覚する。
生千早は改めていいなぁ……いいぞ、深いぞ……
これがアイドルか……未成年の少女に言うのは何だが
「きれいだ」
曲の終わりの余韻が小さくなる最中、無意識に口をついて出たのはそんな言葉だった。
嘘偽りない本心でもあったと思う。
いちキャラクターとしての如月千早、一人の女の子としてみる如月千早。
そしてこの世界に置いて、俺にとって現実となった目の前の彼女。
それは、まぎれもなく美しかった。
とっくに終わっている再生に、静まり返る車内。
見れば如月は茹蛸よろしく赤面していた。
「っ……」
俺自身何かいたたまれなくなって、思わず顔を背けてしまう。

ほんの軽い気持ちでデートなんて言葉を最初に言ったせいか、余計変に意識してしまっていた。
これ語るに落ちてる感じのやつやｗｗｗ
ナニコレ？めっちゃ恥ずかしいわ!!!
アイエエ!?羞恥？羞恥ナンデ!?
さすがにしめやかに失禁ほどではないものの焦ってしまう。
「のっ、みもの買ってくるから聞いて待っててくれ！」
半端ない羞恥に耐えかねた俺はファイルを開いて車を出た。
ちょっとこの空気はまずい！
足早に自販機に向かいながら、ほてった顔を手で仰いで覚まそうとする男が一人そこにはいた、っていうか俺だった。

車内で恥ずかしさから茹だっているアイドルがいた。
というか私だった。
いろんな感情をない交ぜにしていたあの瞬間、音楽の再生が終わる間際に唐突に伊達さんから出た言葉が原因だった。
「きれいだ」と。
自惚れでなければあの時彼は、間違いようもなく私を見てそう言った、
と思う。たぶん。
お世辞なんかじゃなく、アイドルとしての如月千早ではなくて、『如月千早である私』に対してまっすぐにそう告げられた気がして、私は一瞬で顔が熱くなった訳だ。
飲み物を買ってくるといった彼に対し言葉も発せないほどに、私は動揺し思考がフリーズしたのだ。
仕方がないとも思う。
だってこれまでアイドルではないただの「私」に対してあんなにス

トレートに『ああいうこと』を言ってくる人はいなかった。
しかも彼自身変に照れていた。
無意識だったから彼も焦ったのだと思う。
誰だってそうなる。
現に言われた本人の私は盛大に焦っていた。
耐性がない。
低く見積もっても同じ職場の年上の、憎からず思っているであろう異性の相手から、それを言われるのは「そういう感情」を抜きにしてもうれしいけれど。
出がけに彼が言った「デート」という言葉がまた、私を狼狽させる。
これまで培ってきた心の中ではなかった動きに自分で対応できないもどかしさに、少し呼吸が乱れる。
「……ふぅ」
彼が車を出て数分ののち、私はようやく深呼吸してある程度の落ち着きを取り戻した。
美希がいつも言う「ヤバい」っていうのはこういうのもそうなのかしら？
と仕様もないことが頭によぎるくらいには冷静になったはずだ。
まだ少しだけ動揺から震える手で、彼が開いていたパソコンの音楽ファイルを確認した。
ファイル名は「きれいな感情」
意を決し、それを再生する。
穏やかなアコースティックの前奏から淡い質のドラムスが交わり、歌が始まった。
先ほどの曲と違ってひどく穏やかなＢＰＭで、囁くような歌詞が紡がれる。
ああ、この詩は効く。
私には。
「今の如月千早」と彼が言った意味も分かる。
これは、何気ない日常に、誰かとともにあることに対する喜びや想い。

ほかでもない自分を見つけてくれた人に愛や、感謝を伝えようとするような、そんな曲だ。
透明のようで冷たかった世界に色を付けてくれた誰かに、この曲の場合は劇中の人物に当たるであろう「あなた」に愛を告げる歌。
先ほどの伊達さんとのやり取りを、ふと思い出した。
まるで恋人のようなやり取りだった。
嗚呼、わたしは。
まだそんなことも知らないのに恋の歌に心乗せられると思い込んでいたのか。
大きな収穫だ。
彼と出会ってそう多く時間を共にしたわけではないものの、彼はそう
それこそたくさん「きれいな感情」を私にもたらしてくれたのだ。
「なおと……さん」
青い海と青い空が、いつもより少しきらめいて見える。
窓にもたれ音にふけりながらつぶやいた彼の名前が不思議と心にはまった気がした。

無事に飲み物をゲットした俺は冷静さを取り戻して車へと戻ってきた。
いやぁ、生動揺照れちーちゃんは強敵でしたね。
「おかえりなさい、なおとさん」
そこにはまぶしい笑顔のアイドル歌手がいた。
ていうか如月千早だった。
さっきの今でこんな破壊天使砲並のキラキラ笑顔で名前呼びされたら仕方ない。
膝から崩れ落ちるのはまれに良くあることだよな？
「大丈夫ですか、なおとさん？それより、あの３曲、やります、歌わせてください」

すごく生き生きしてらっしゃる!!
まじちーちゃんの笑顔リスペクトっす!・かわいい!・ヤッター!・
「あと、これから私のことは苗字じゃなくて名前で呼んでくださいね、なおとさん」
あ、ハイ（震え声）
よくわからんが嬉しすぎて現界保てず砂になりそうなんだけどこれw
答えは得た、大丈夫だよ遠坂、俺たちが積み上げてきたもんは全部無駄じゃなかった……高木（社長）もがんばってるし、俺も頑張らないと。
海より空より美しい蒼がそこにいた。
ていうかやっぱり如月千早だった。

『まるで月光の伝説のように』

第五話　『まるで月光の伝説のように』

打ち込み終わった楽曲を手に事務所へと向かう中、車内にはラジオの音声が流れていた。

「三曲ともずいぶんと毛色が違いますけど、すごくいい曲ですよね」

「はい、出来栄えは自分の中でもとてもよくできているとも思いますし、それぞれの楽曲にすごく思い入れがあります」

「二か月前の春香ちゃんたちのシングル以降かなりトバしてますねぇ、７６５さん！もう新曲あがってたりして？」

「伊達さんのことだから、たぶんそうだと思います、今頃車の中か事務所でこの放送も聞いているんじゃないかと」

撃てば響くような千早（ちゃんと名前呼び）のトークが軽快に番組を彩る。

はい！聞いてます！

ドーモ、ダテ＝サンデス！

「それは例の作詞作曲を手掛ける伊達さん？」

「はい、仕事の早い方で、それでいて豊富な音感がある人なので、すぐ新しい曲をいただけるんです」

「外注じゃなくてもジャンル豊富なのはあたらしい強みですね」

「おかげさまで私も音楽の幅が広がりそうです」

「おお～！歌姫の名に恥じない頼れるお言葉をいただいたところで、聞いていただきましょう、楽曲は現在四週連続ヒットチャート一位を獲得中の７６５プロダクションＤ　ＰＲＯＪＥＣＴ　コード：Ｄ―ＭＯＤＥＬで、『ＹＯＵ』」

あぁ^～、せっかく流れ始めた曲聞こうとしたらもう事務所付近かいｗ

仕方なしに車を駐車スペースに停め、事務所へと歩き出す俺。ほどなくして、事務所の扉を開ける。

「おはようございました」
あえての過去形。
これを言うときは可能な限り真顔であることを意識するのだ。
「おはようございます、伊達さんっ」
あさイチ（なお１０時）で小鳥お姉ちゃんの笑顔いただきましたァ〜！
最高やで。
「もう三浦さん来てます？」
自分用のデスクにあるＰＣを起動しながら訊ねると
「今竜宮小町のイベントのことで律子さんと皆で会議室ですね」
と返ってきた。
だとすればそう待たずともよさそうだ。
今回の曲は我らがおねーさんである三浦あずさ氏のために引っ張ってきた楽曲だ。
このほど、三浦はドラマ主演が決まり、メインヒロインとして撮影がスタートすることになっている。
そのドラマ用に、楽曲を用意できないかという要請があり、事前に脚本に目を通させていただき、ドラマの世界観にドンピシャな楽曲を持ってきたわけである。
ストーリーはこうだ。
三浦あずさ扮するメインヒロインは大学に通う２１歳、ずっと昔からいくつかの同じ不思議な夢を見続けていた。
あらすじは次の通り、一つは中世ヨーロッパでの前世。
貴族の娘で、とある領主の子息との大恋愛の夢。
一つは古代の日本。
集落一の器量良しの乙女だったが、飢饉を防ぐために、生贄の巫女として邪神にささげられるも、勇み者の旅人に命を救われ、恋に落ちる前世。
ある時は遥かな昔、異国の奴隷だったヒロインを買い上げ、奴隷としてではなく、妻として迎えてもらうという愛ある夢。
すべての夢にはある共通点があった。

「次に生まれてくる時も互いを見つけきっと愛し合おう」という今わの際の誓い。
そして現代の日本へ舞台は移る。
という、所謂転生系ラブロマンスなわけだ。（原作は少女漫画らしい）
ミラクル・ロマンスもびっくりなシナリオやな。
もちろんこのドラマに対応できる楽曲を俺は前世において好きだったある歌手・兼声優のあの人から借りることにした。

「というわけで、この二曲をＯＰとＥＤ用に持ってきたんだが」
会議が終わった三浦達に早速曲を聞かせ、反応を見る。
「イイですね、話の大筋にも歌詞がすごくマッチしてますし、どちらもオオトリに使えそうな曲ですよ」
りっちゃんこと秋月はそう答え、喜んでくれた。
Ｐとしても、番組タイアップ曲は半端なものが出せないことはわかっているはずなので、彼女からＯＫが出るなら先方も納得のいくことだろう。
「やっぱり伊達さんはすごいですねぇ～、ぜひ歌わせていただきます」
三浦さんも両手放しで嬉しそうにしてくれている。
身振り手振りのたびに……その……胸がね……。
ホント目の保養になる（断言）
そのバストは実際豊満だったを地で行くナイスバデーにさすがの伊達さんも目のやり場にこまりまっくすですわ。
その胸はわしに対する視線誘導が目的かね……？
そのムネを良しとする!!
「いいな～、亜美も早く曲もらいたい～っ」
わざとすねたような表情で双海妹が不満をあらわにする。

まあそうだよな、水瀬には事前に一曲回ってるし（三話参照）
「ちゃんと全員に回せるようにプラン考えてるから大丈夫だよ」
なだめるように頭をなでる俺。
「う～、ホントかな～……？」
疑わし気にこちらを見上げる双海妹氏はかわいいなぁ。
「双海姉妹はユニットで3曲行くつもりだから」
「ホント!?ダテッチやるじゃん！」
きらりと光る笑顔で双海氏が抱き着いてくる。
あの、精神的距離が近すぎやしませんかね……？
まあ年若い娘さんに抱き着かれるのは全然忌避に値しないためむしろウェルカムっていうか、もっとハグしてもええんやで？
年齢相応のつつましやかな柔らかさを堪能しているとすかさず水瀬から待ったの声。
「あんたねえ、少しは恥じらいってモンを持ちなさいよ……伊達さん困ってるじゃない……」
呆れ顔である。
こっちとしてはこういうスキンシップも悪くはない。
むしろ良い。
だって、可愛い女の子だよ!?
素直に嬉しいです。
「ええ～？そんなこと言って～、いおりんこそ意外とダテッチに甘えたいんじゃないの～？」
新遊戯俺登りをしながらジト目を向ける双海（あ）に「んなわけあるか～！」と逆切れいおりんマジギレ、いや、俺的には甘えてもらっても一向にかまわんのだけれども。
少女らしい甘い香りが鼻腔をくすぐる。
ただ一つ思うのはひとえに「逮捕されませんように」である。
「いー加減にしなさい！この後だって予定あるのよ!?」
見かねた秋月に首根っこをつかまれ、猫状態にｗｗｗ
「まあまあ、とにかくこの二曲をレコーディングするということで、聞きこんどいてください、コレ歌詞カードです」

と、秋月をなだめつつ、俺は歌詞カードを三浦に手渡す。
「ハイ！頑張りますねっ」
ああ、三浦様は本当に笑顔の素敵なお方……。

某日、ドラマ特別先行上映会場
「というわけでですね、長いこと監督やってますけど、こんなハイスピードで決定した主題歌は今までないですよ、伊達君世界観つかむの早すぎて」
会場で監督さんがからからと笑い、記者たちにもにわかに笑いが起きる。
「でもホントありがたいよね、話行ってたったの一週間でめちゃめちゃいい曲持ってくるんだもん、それがばっちり思ってた雰囲気で……」
ほう、と会場が感嘆したのが伝わる。
「いやあ、出来のいいお話に一気に引き込まれちゃいまして……しかし、俺ここに居ていいんですかね？役者さんたちと同じ壇上ですよ？」
なぜか壇上にいた俺はうまく話をつなげつつ笑いを誘う。
「いいのいいの、俺も思ってたよりすごい気さくな方で助かってるから」
と、隣にいた俳優さんがイケメンスマイルで応対してくれた。
三浦も緊張することなくにこやかにしている。
「せっかくなんでオープニングとエンディングは三浦さんに生歌も披露してもらいますから、よろしくお願いしますね」
監督の言葉に「お任せください」と笑顔でこたえる三浦。
ほどなくしてトークも終わり、曲の披露と相成った。
「それでは聞いていただきます、二曲続けてになりますがお付き合いくださいね？一曲目はオープニング曲の『ユニゾン』、二曲目がエンディングの『ループ』です、記者の皆さんは宣伝もお願いしますね～」
ＭＣもこなしつつ小気味良い笑いが起きると、音楽が流れだす。

そう、演出の都合上ここまで引っ張ったわけだが、今回は真綾ちゃんの曲なのだ。
え？予想してた？うるせーやい。
だって好きなんだもん。
都合よく合う仕事来るじゃん？
そしたらもう、再現するしかないじゃん？
ドラマの主人公の名前からとった『Ｄ　ＰＲＯＪＥＣＴ　コード：ＭＡＹＡ』
として今回はこの二曲である。
さすがの歌唱力で俺としても万々歳だ。
Ｆ９１なだけはある（せくはら）
なんとぉーっ！

『ちょっと古いもの「にも」いいものはあるということが、なぜわからん!?』

第六話『ちょっと古いもの「にも」いいものはあるということが、なぜわからん!?』

珍しく俺こと伊達直人は、やや広めの会議室に赤羽根Pとともにいた。

双海姉妹のユニット楽曲を確認してもらうためである。

「今の3曲について、バネさんの意見が欲しいんだ」

つい今しがた聞いてもらった楽曲について、彼としてはどう見るのかを聞いてみたかった。

「いいと思うよ、ソロ用も真美や亜美の、所謂『属性』にマッチしてると思うし、ほかが攻めてる内容のわりにメインのデュオ曲はアイドル然としたかわいい曲に思える」

しっかりと聞きこんだ上で感想をくれる羽根P。

よほど気に入ったのか再び再生を始めている。

「振れ幅のある曲目だけど、プロデューサーとしてはこれでゴーサイン、かな」

「そいつは重畳だ、ソロ用はアイドル然な感じからあえて離した曲にした甲斐があったよ」

ＯＫをもらった俺は若干ゃニヤつくのを抑えつつも、曲目が通ったことに喜びを感じた。

それはまあ、仕方ないことではある。

この三曲は名曲ではあるが、次のユニットである真美・亜美には年齢的なアレがアレでアレなのだ（ＩＱの低下）

まあ前世基準の話だけど、どうでもいいかｗ

とにかくこの三曲を双海姉妹に甦らせてもらうことは、それ自体がある意味カタルシスというか、カルマというか背徳感というか、ともかくなんかそんな感じだ。

さて、プロデューサーのお墨付きももらったところで、あとは姉妹

に仕込みを済ませるだけとなった（ゲス顔）
あんな若くてみずみずしい青い果実を思うさま自分好みに仕立て上げることができるなんてよお、作曲家になってよかったぜぇ（物は言いよう）
「ゲスな言い方過ぎて自分に草」
しょーもない妄想を含んだひどい表現を、自信でツッコんで思わず笑う俺。
これは傍から見たらほぼ事案ですよｗ
しかしまあ、改めてこの三つの曲のタイトルを眺めてふと、前世の思い出に浸る。
界隈のものでこの曲たちを知らぬものはいないであろう名曲たち。
この世界では、俺の手によって全面的に表に出てくることになる。
よく考えたら、元ネタ的に千早にだってそういう系統の曲を渡しているわけだし、そんなにビビる必要もないか……
ともあれ、どんなジャンルにも良曲、或いは神曲と呼ばれるものは存在する。
今、この時間軸の地球において、俺だけが知る名曲たちは、７６５プロのアイドルによって、一曲、また一曲と確実に花開いている。
幾度目かの喜びをかみしめながら、俺は音無さんの事務処理を手伝いつつ、双海姉妹の下校を待った。

午後に入り、日差しもある程度落ち着いてきた頃、にわかに廊下が騒がしくなり、ふと目を上げれば事務所の扉が勢いをつけて開け放たれ、右に長い房のＪＣと左に短い房のＪＣが、ついにやってきた。（なお本人たちからしたら逆ゾ）
「よっしゃあ！待ってたぞＪＣシスターズよ！」
唐突に机をたたき立ち上がる俺に肩をビクッと反応させる音無小鳥お姉ちゃんの可愛さはさておき
「ファッ!?どーしたのさダテッチ、いきなりテンションバクアゲじゃん☆」
ん？今……

とにかく高速反応で乗っかってきた双海妹氏。
「宿命の二人のレジスタンス楽曲が不可能を可能へと変えたのでもってきたよ（二人のユニット楽曲が出来たのでもってきたよ）」
不意に口を突いて出たのは常人には理解しがたい中二言語であったが
「…まさか実在したとはな……で!?やったー!・運命の最終章は開かれ亜美どもの時は満ちたですなぁ……ムッフッフ（マジで!?やったー!・ついに亜美たちの出番ですなぁ……ムッフッフ）」
と打てば響くがごとき見事な返答が来る。
さすがだな亜美隊員……同じ地球とはいえ全然別時空のコ→コ←（アイマス世界）においてノムリッシュを習得しているとは……
「かの者って伝説に謳われる間言ってた真美たちのリユニオントラックスだよね…っ!?（それってこの間言ってた真美たちのユニットだよね？）」
真美隊員も即応反射でノム言語、お前らホントすげえな。
「え？……え？・レジスタンス？……最終章？……りゆにおんとらっくす……？」
著しい言語変換率にそばで聞いていた音無さんは混乱している。
相も変わらず、その首をかしげる動作などがいちいちかわいかったりする。
信じられないだろ？年上なんだぜ、これで。
「早速だが聴いてみるか？」
懐から意味ありげにディスクを取り出す。
「聴く!」
姉妹の声が完全に一致した瞬間だった。
双海の姉妹に、早速音楽を聴いてもらうことと相成った。
吾輩は音楽家であり、事務所に楽曲を提供しているからして、作った音楽をアイドルに聞かせぬという法などない。
この年若い二人の娘さんには、いったいどういった曲がよいのだろうか。
と、考えを巡らせて居った時分、ふと吾輩に天啓が舞い降りたので

ある。
もしやこの世には、或いはやはり、神は居申す也。
などと身勝手な信仰を捧げようとせんほどに、その天啓なるものは衝撃的であった。
とかなんとか、似非文学風に語ってはいるが、俺に巻き起こった発想はクソゲスナメクジ級のものだ。
回想
「亜美真美ちゃんの楽曲か～……」
「エロゲも名曲いっぱいあったな～」
「せや！」
回想終了！終わり！閉廷！

この結果が、彼女たちに渡す曲目を決定する天啓（ゲス）である。
エロゲの楽曲という点がすごく背徳感あるよね？
こう、欲望まみれのまなざしを理解できない無垢な個に向けているのに、返ってくる屈託のない笑顔に萌え死につつ罪悪感というか、そう言う感じの気分に勝手になるやつ（名前はまだない。）
実際エロゲにはいい曲はたくさんある。
物語を盛り上げるだけではない、歌詞と音による一つの別世界の構築。
真っ白なシ者さんも言ってたことだけど「歌はいいね」ってやつですよ。
マイナーかメジャーかの区別が存在するだけで、音楽には貴賤はない。
だからこそこの三曲をあえてこの子たちに歌ってもらおうと思ったんだ（建前）
ぐへへ、未成年の美少女にエロゲソング歌わせるのは気分がいいぜ！
あ^～、たまらねぇぜ（本音）
純粋で邪な思いを胸に、まずは一曲目を再生する。
ユニットデュオ用として用意したのは、言うまでもない著名エロゲ

シンガーであるＫＯＴＯＫＯ氏が歌った「さくらんぼキッス～爆発だも～ん～」である。
そこ、後ろ指ささない！
しょうがないじょのいこ。
この曲すごくわちゃわちゃしてるし、カワイイし、双海姉妹にはよく合うと思うんだ。
のっけから二人の瞳の輝きは宝石もかくやというほどに、美しく潤っていた。
曲に引き込まれているのであろうその反応は、「この曲にしてよかった」
と、言わしめるに足る十分な説得力を見せた。

内容はいたってシンプルな、恋する乙女の心を描いた歌詞。
曖昧な言葉でお茶の間を濁しつつ、愛しい「彼」と結ばれる過程と、その間に胸の内に起こる少女（登場人物は全員１８歳以上です）のときめきを歌う曲だ。
残念（喜び）ながら、この日本には年下好きが一定以上いる。
前世のアニメキャラだと例えば魔法少女に分類されるヒロインたち。
例えば学園物のヒロイン、例えばエルピー・プルなどに類する、所謂「ロリキャラ」である。
ぼくは木之本桜ちゃんが好きです！（半ギレ）
おっと、話が逸れそうになったな、すまんすまん。
まあ、ロリ需要を高水準で満たせる双海姉妹に、こういう曲を歌わせることで７６５ファンニキたちに、じゃぶじゃぶ課金してもらうという目論見もある。
メインに据えたこの曲と、ソロ２曲との温度差を利用して、新たな層の取り込みも狙いたい。
「さくらんぼ（以下略」のような少女チックさを、秒で取っ払った上で新たな双海姉妹の一面を魅せたいと思う。

そんな要素を満たす温度差が、次に用意したそれぞれのソロ曲である。

双海真美用のソロ「Ｌｙｔｈｒｕｍ」

そして

双海亜美用のソロ「Ｉ　ｐｒａｙ　ｔｏ　ｓｔｏｐ　ｍｙ　ｃｒｙ」

「さくらんぼ～」からの流れだと、テンションが激しく上下してしまう組み合わせかもしれないが、二人ならきっかり歌い切ってくれるはずだ。

この事務所のアイドルの中でもトップクラスにアニゲーに精通する双海姉妹は、もともとゲーム曲だったこれらとの親和性は、いまさら改めて語る必要もないだろう。

元気印の双子の印象から、少しだけ大人なイメージに変化した真美であれば、おそらくしっとりとした「Ｌｙｔｈｒｕｍ」の世界観を、余すことなくよみがえらせてくれる。

単なる元気キャラとしてではなく、真美に先んじてユニット活動で、アイドルとしてのポテンシャルを遺憾なく発揮していた亜美であれば、「Ｉ　ｐｒａｙ　ｔｏ　ｓｔｏｐ　ｍｙ　ｃｒｙ」を狂いなく表現するだろう。

ぼくには歌ってくれるアイドルがいるんだ。

こんなにうれしい事はない。

真美と亜美は歌いきることができるか？（当たり前だよなぁ？）